

そ の 他 の 調 査

平城宮跡発掘調査部

1. 遺 跡 の 調 査

穴田遺跡（富山県東砺波郡井波町） 富山県教育委員会による発掘調査。1971年4～5月。狩野・阿部・小笠原が参加した。奈良～平安時代初期の莊園関係建物跡の調査をおこなった。阿部義平「穴田遺跡」（『日本歴史』1971年8月号）参照。

伊場遺跡（浜松市伊場） 浜松市教育委員会による調査。1971年4月以降隨時。狩野・佃が参加した。出土木簡の釈読および写真撮影をおこなった。浜松市遺跡調査会『伊場遺跡出土文字集成』（1971年12月）参照。 第1図 安芸横見廃寺出土軒丸瓦

篠尾廃寺（福井市足羽町） 福井県教育委員会による発掘調査。1971年7月。沢村が参加指導した。従来から知られていた心礎を中心に方12mの塔土壇を検出した。

飛鳥寺北方（奈良県高市郡明日香村） 飛鳥・藤原宮跡調査室が実施。1972年8月。家屋新築に伴う事前調査。後世の攪乱のため、飛鳥・奈良時代の遺構は検出できなかった。

横見廃寺（広島県豊田郡本郷町） 広島県教育委員会による発掘調査。1971年8月・11月。松下が参加した。大和・山田寺式單弁軒丸瓦および法隆寺若草伽藍跡類似のパルメット文軒丸瓦を出土する奈良前期の寺跡。建物基壇および築地痕跡を検出した。広島県教育委員会『安芸横見廃寺の調査』1（1972年3月）参照。

能登国分寺跡（七尾市国分町・古府町） 七尾市教育委員会による発掘調査。1971年9～10月。坪井・佃・村上・黒崎が参加した。金堂跡・塔跡の検出による伽藍配置と南面築地検出による寺域の確認をおこなった。七尾市教育委員会『史跡能登国分寺跡—第2次調査概報』（1972年3月）参照。

じょうべのま遺跡（富山県新川郡入善町） 富山県教育委員会による発掘調査。1971年10～11月。伊東・佃・高島・岡本・山中が参加した。平安時代前期の莊園関係建物群の発掘をおこなった。富山県教育委員会『じょうべのま遺跡発掘調査概報』（1972年3月）参照。

一乗谷朝倉館跡（福井市足羽町） 福井県教育委員会による発掘調査。1971年11月。牛川・宮本が参加した。南面土塁一帯の発掘により南門・北門

第2図 じょうべのま遺跡

・西南隅櫓等を確認した。

大宰府都府樓跡（福岡県筑紫郡大宰府町） 福岡県教育委員会による発掘調査。1971年11月。
坪井・沢村・田中が指導助言した。

森の宮西遺跡（大阪市東区森の宮西の町） 阪神高速道路公団による発掘調査。1971年12月。
沢村が指導した。桃山～江戸初期の石垣を検出した。

阿波国分尼寺跡（徳島県名西郡石井町） 徳島県教育委員会・石井町教育委員会による発掘調査。1971年11～12月。沢村・田辺が参加した。築地、溝、北門跡を検出し方1町半の寺域を確認した。徳島県教育委員会『阿波国分尼寺跡第2次調査概報』（1972年3月）参照。

平城京北京極大路地域（奈良市佐紀町） 平城宮跡発掘調査部第76次発掘として実施。1972年1月。平城京北京極大路および右京1条2坊1の坪と8の坪の境をなす小路の調査をおこなったが、条坊に関する遺構は削平で認められず、古墳時代の溝・竪穴等を検出した。土器片・埴輪片とともに車輪石片も出土している。古墳時代の集落跡の存在も予想された。

西隆寺跡（奈良市西大寺町） 奈良県教育委員会による発掘調査。平城宮跡発掘調査部が担当した。1972年2～3月。すでに実施した東門・塔・金堂にひき続き、南面回廊跡・築地基底部および瓦溜を検出した。

平城京羅城門跡（大和郡山市観音寺町） 大和郡市教育委員会および奈良国立文化財研究所による発掘調査。1972年2～4月。1969・1970年にひき続き、新たに門基壇北西部および朱雀大路西側溝などを検出した。

鳥羽離宮跡（京都市伏見区竹田） 京都市教育委員会による発掘調査。1972年3～4月。牛川・伊東・佃・藤原・田中・黒崎が実測等を指導した。市道造成工事にともなう庭園跡の調査で、池護岸および船着場を検出した。

周防銭司遺跡（山口市銭司） 山口県および山口市教育委員会による発掘調査。1972年3～4月。沢村・町田・小笠原・宮本（長）が参加した。遺跡の範囲確認の調査をおこない、方2町であることが明らかになった。

2. 遺物の調査

奈良市発見の御物石器 この資料は、奈良市大森町277番地の大森池の北側で発見された。道路側溝改修工事中に田中茂高氏によって採集されたものである。他の遺物は発見されておらず、

第3図 奈良市発見御物石器 龍文時代の遺跡かどうかわからない。長さ34.2cm・幅12cm・厚さ7.5cm・重さ4.32kg・硬質砂岩製。石川県比良遺跡・富山県中川遺跡出土のものに類似する。御物石器は飛驒を中心として限られた分布範囲を示し、龍文時代後・晩期の所産といわれている。発見例は70か所を越えるが、発掘による資料は石川県御経塚遺跡1例のみである。いままでは滋賀県杉沢遺跡がその西限として知られていた。奈良県より出土したことが認められるならば、分布圏が広がることになり注目されよう。（岡本東三）

その他の調査

第4図 水木家所蔵瓦拓影および実測図

水木家所蔵の古瓦 考古第3調査室では、昭和46年度研究調査の一環として、水木直簡氏（大和郡山市）の御厚意により、水木要太郎氏収集の軒瓦類を調査する機会を得た。氏の長年にわたる収集資料は、膨大な量であり、研究上貴重なものが数多く含まれている。ここにその一部を紹介して調査の簡単な報告としたい。

収藏されている瓦類は、大部分が大和の主要寺院跡から出土したもので、総数470点にのぼる。軒瓦は、飛鳥時代から近世に至る各種類を含むが、大半は平安時代までのもので占められている。軒丸瓦は185点、軒平瓦は216点ある。他に埴仏、瓦経類があり、朝鮮の瓦も約40点ある。ここでは、そのうちの完形資料を数点えらんで紹介する。

青木千坊出土と注記されているひと組みの軒瓦（1・2）は、いずれも從来橋本廃寺、青木廃寺跡出土瓦として知られているものである。軒丸瓦は線鋸齒文縁複弁5弁で、鋸齒文の間に「大工和仁部貞行」と陽刻されている。これと同種類のもので、文字の全くないものと、さらに「□□秦」と読める3文字を「大工」の前に陽刻したものなどもあり注目される。軒平瓦は3重圓線で囲んだ内区に逆字で「延喜六年造檀越高階茂生」の陽刻がある。

山田寺出土の小形軒丸瓦（3）は、同寺出土のものとしては珍しく、周縁が欠けているため正確な面径はわからないが、約13.5cmである。文様は大形の軒丸瓦とほとんど同様の構成であるが、蓮子の数に相違がみられる。

他に大官大寺のひと組み（4・5）も完形資料として貴重なものである。

（田辺征夫）